



環境デザイン統合教育プログラム



IEDP

Integrated Environmental Design Program

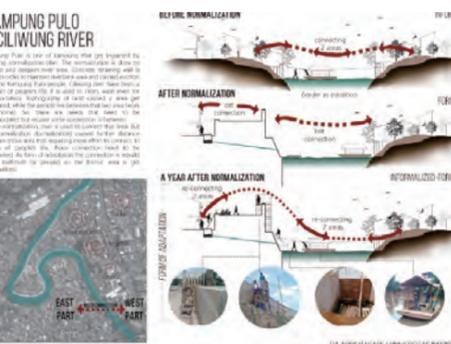
東京大学新領域創成科学研究科環境学系（柏キャンパス）

- Architecture Design Studio
- Architectural Structure Design Studio
- Urban Design Studio
- Landscape Design Studio
- Urban Nature Design Studio
- Urban Watershed Design Studio
- Community Business Design Studio
- ICT & Multimedia Design Studio
- Integrated Environmental Design Theory

<http://www.iedp.site/iedp/iedp-top.html>

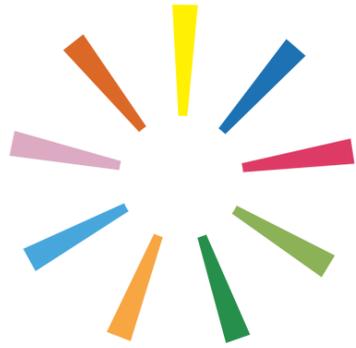


- 建築環境デザインスタジオ
- 建築構造デザインスタジオ
- 都市環境デザインスタジオ
- 緑地環境デザインスタジオ
- 自然環境デザインスタジオ
- 流域環境デザインスタジオ
- 地域活動デザインスタジオ
- 情報環境デザインスタジオ
- 統合環境デザイン論



目次

環境デザイン統合教育プログラムとは	2
2020 年度スケジュール・修了要件	3
スタジオ一覧	4
共同研究「社会実験構想学」の紹介	6
新設スタジオ教員紹介	8
過年度のスタジオ成果	
建築環境デザインスタジオ	10
建築構造デザインスタジオ	12
都市環境デザインスタジオ	14
緑地環境デザインスタジオ	16
自然環境デザインスタジオ	18
流域環境デザインスタジオ	20
IEDP これまでのあゆみ	22
Web サイト URL・問合せ先一覧	24



IEDP

Integrated Environmental Design Program

環境デザイン 統合教育プログラム(IEDP)とは

専攻を超えたスタジオで環境デザインの専門家を養成する

IEDPは、2007年度に環境学研究系に設置された、専攻横断型のデザイン教育プログラムです。8つのスタジオと1つのオムニバス講義から構成されており、これまでに100名近いプログラム修了生を輩出してきました。履修生は、複数のスタジオで制作・提案活動を行い、オムニバス講義で各スタジオのエッセンスに触れることにより、環境デザインに関わる幅広い技術と知識を習得できます。プログラムでの学びを履修者自身が各々の哲学に基づき深化させることで、新しい時代の環境デザインの専門家が次々と生まれていくことが期待されています。

実践を見据えた環境デザインの多彩なアプローチを学ぶ

IEDPが扱う「デザイン」は、従来の「形を創り出す」行為にとどまらず、環境学が抱える諸課題の解決に向け、思考・概念を組み立て、それを様々な媒体で表現する行為のすべてを含みます。本プログラムは、建築・都市・ランドスケープ等の従来の設計領域に加えて、情報技術や地域活動など多種多様なスタジオから、環境デザインの多彩なアプローチを学ぶことを特徴としています。2020年度からは、民間企業との共同研究を通じて、スタジオで生まれたアイデアを社会実験を通じて世の中に展開することも可能となり、実践を見据えたプログラムへと進化しています(p. 6-7)。



2020年度の受講にあたって

履修・修了要件

1. 本プログラムが想定する履修者は、環境学研究系各専攻の学生です。学部で建築や都市計画、造園、緑地計画、農村計画、工業製品などの設計を既に学んだ人が、知識の幅を広げ技術を深められるように組み立てられている一方、学部で設計教育を受けていない学生が、それぞれの知識を生かし力量に応じて取り組めるように工夫されています。
2. 修了条件は、環境デザイン統合教育プログラム科目の「デザインスタジオ」の中から6単位以上、かつ「統合環境デザイン論」2単位の取得です。条件を満たした学生には、「環境デザイン統合教育プログラム修了証」が新領域研究科長から授与されます。
3. 本プログラムは、入学後に履修登録することで履修できます。
4. 各デザインスタジオは単独でも履修できます。



2020年度のスケジュール

今年度は新設の2スタジオ(情報・地域活動)を含む6スタジオが開講します。

環境デザイン統合教育プログラム 共通ガイダンス

4月9日(木) 18:45~20:30(柏キャンパス環境棟6階講義室)

IEDPのスタジオ履修希望者は全員出席してください。プログラム全体の趣旨説明、各スタジオの過去の活動について説明し、プログラム履修の手引きとします。

夏	1限 8:30-10:15	2限 10:25-12:10	3限 13:00-14:45	4限 14:55-16:40	5限 16:50-18:35	6限 18:45-20:30
月						
火				建築環境デザインスタジオ1 (岡部)		
水						
木		情報環境デザインスタジオ (小林・佐々木)				統合環境 デザイン論
金	建築環境デザインスタジオ1 (岡部)			地域活動デザインスタジオ (鈴木)		
冬	1限 8:30-10:15	2限 10:25-12:10	3限 13:00-14:45	4限 14:55-16:40	5限 16:50-18:35	6限 18:45-20:30
月						
火				都市環境デザインスタジオ (清家)		
水						
木				建築構造デザインスタジオ (佐藤)		
金				自然環境デザインスタジオ (寺田)		自然環境デザインスタジオ (寺田)

- ・ 建築環境デザインスタジオI(岡部)はS2タームのみ。6月2日(火)開講。
- ・ 建築環境デザインスタジオII(岡部)はA1タームに集中開講。
- ・ 流域環境デザインスタジオ、緑地環境デザインスタジオは、2020年度は休講。
- ・ 担当教員の許可により他の講義と重複履修することが可能な場合がありますので、詳しくは各スタジオの担当教員にご相談ください。
- ・ 教育プログラム全般、各スタジオの間合せ先については、p.24の間合せ先一覧をご確認ください。



Informal Urbanism: スラムマッピングと小さな建築フィールド実践

建築環境 デザインスタジオ

主担当：岡部明子 教授

建築スタジオ1では、スーパーマクロスケールで、途上国都市人口の30%が居住しているとされるスラムのマッピングをグローバルに比較可能なかたちで行います。劣悪とされる物的環境への想像力を鍛え、その多様な魅力と潜在力への洞察を高めます。建築スタジオ2では、スーパーミクロスケールで、ジャカルタの具体的な高密度インフォーマル地区をフィールドとして、地元コミュニティと協働で実際に空間をつくる建築実践を行います。インドネシア大学の建築の学生たちと2010年から、毎年テーマを設けて行ってきた国際建築スタジオです。2019: Trading spaces, 2018: Spontaneous Place Making, 2017: Global Scenarios/ Imminent Commons, 2016: Formal/[IN]Formal x Celebration.



本プログラムは、デザインスタジオをベースとし、従来の領域構成を超えた環境デザインの専門家を養成する大学院教育プログラムです。8つのデザインスタジオと講義科目「統合環境デザイン論」により構成されています。

人と自然の持続的なかかわりを追及する

緑地環境 デザインスタジオ

主担当：横張真 教授

ランドスケープは、人と自然のかかわりの一つの表現形式です。日本のランドスケープが変革期にある中、ランドスケープを構成する自然環境を適切に理解し、そこでの農業など生業のあり方や市民との協働、持続的な社会の形成等も考慮しつつ、人と自然の新たな関係をいかに形成するかが問われています。本スタジオでは、都市と郊外における様々なランドスケープについて、土地の自然環境や社会環境をさまざまな手法で調査、解析、評価した上で、的確に計画するための基礎的手法を習得することを目指します。



自然環境に身をおいて発想する

自然環境 デザインスタジオ

主担当：寺田徹 准教授

自然スタジオでは、受講生自身による日常的な自然環境との関わりを通じたデザイン提案を行っています。屋外環境全般、あるいは公園・里山・農地といった特定の緑地環境を対象として、自分自身の身体を通じた体験から得られる情報を頼りに、ランドスケープデザインの手法を援用しながら、あるべき自然と人間の豊かな関わりを形にしていきます。定型的な計画・デザインの手法を学ぶことよりも、自身の体験や疑問に向かい合い、その中から見えてくることに基づき提案を立ち上げることを重視しています。2018年度までは演習林(富士癒しの森)を、2019年度は柏キャンパスを対象地として提案をまとめました。



Integrated Environmental Design Program

IEDP



安全な構造デザインを導くエンジニアリング手法の実践

建築構造 デザインスタジオ

主担当：佐藤淳 准教授

豊かな空間を生み出す構造デザイン。その大前提は、安全性の確保です。本スタジオでは、屋外に実際に架構を構築することを最終目標に、構造デザインを提案するために必要な知識、技術を学びます。各自で材料の特性を生かす形状を提案し、幾何学的にコントロールするパラメーターと、力学的・環境的な評価指標を把握します。そして簡易な構造実験と構造解析を行い、モックアップを製作して施工の問題を明らかにした上で、案を1つに融合させて屋外に実際に構築します。一連の過程を実践することで、その形態を設計施工する手法が構築されます。



都市を読み解き数十年先のデザインを構想する

都市環境 デザインスタジオ

主担当：清家剛 教授

都市は生き物です。居住者の属性やライフスタイルの変化に応じて、地域のニーズや課題は時代と共に変化していきます。本スタジオは、つくばエクスプレス沿線・柏の葉を対象とした、柏の葉アーバンデザインセンターや沿線の大学との共同による実践的演習です。まずは現場に出て地域を解読することから始め、ヒアリングで居住



者のニーズや生活パターンを把握し、都市の成り立ちや構造を読み解くことで、地域の可能性を追求します。景観だけでなく都市活動を支える仕組みと共に、数十年先までのシナリオを描き、住み続けるためのエリアマネジメントの提案にまで繋がります。

地域の景色を生み出す地域活動をデザインする。



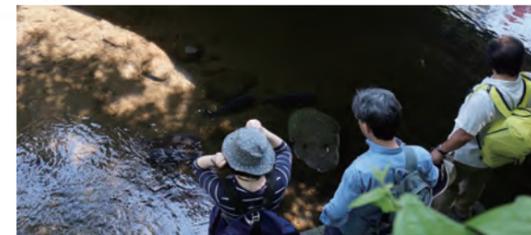
地域活動 デザインスタジオ

主担当：鈴木亮平 非常勤講師

※2020年度新設

まちづくりにおいて、ハードの整備ももちろん重要ですが、日々の暮らしの中に豊かな景色をつくっていくのは、そこに住む人々による営みや活動です。本スタジオでは、郊外住宅地に発生する「空き地」(農地や里山も含む)を活用し、まちを変えていくための地域活動をデザインします。柏市の「カシニワ制度」の全面協力のもと、空き地や里山の整備活動をしている市民団体と連携し、課題解決に向けた提案だけでなく、実際に制作や実験を行いながら、これからの郊外住宅地のあり方を模索していく実践型のスタジオです。

人一社会一自然の相互関係を学融合の視点で読み解く



流域環境 デザインスタジオ

主担当：徳永朋祥 教授

気候変動や災害リスクに対して地域社会の社会的・生態学的弾力性(レジリエンス)をどのように高めることができるのか。本スタジオは、河口域を含む沿岸から川、集水域全体を含む「流域」という単位に着目し、総合的に人一社会一自然システムを読み解く文理融合型のスタジオです。地域の基盤を構築する地質・地形・水系をたどり、土地利用の変遷を捉え、社会と人の営みを歴史的な脈も含めて描写してみませんか。都市では見えにくくなっている流域とその多様な機能・社会空間としての意味づけを豊かにできる実践を、具体的に地域の人びとを考えてみましょう。



デジタルメディアの道具箱を手に入れる

情報環境 デザインスタジオ

主担当：小林博樹 教授

佐々木遊太 非常勤講師

※2020年度新設

広義の「情報」が取り巻く環境のデザインにあたっては、想定できる道具、すなわちデジタルメディアを幅広く持っておくことが効果的です。皆さんは、既に道具箱を持っています。パソコンです。パソコンは、様々なデジタルメディアを個人的にある程度コントロールできる優れた道具箱です。本スタジオでは、映像、音響、デバイス、それらを束ねる通信について、簡単な実装を通してその性質・特徴を把握し、実際に手を動かしてプロトタイプングできるようにします。同時に、そのプランを適切に共有するための技法も学びます。



様々な分野の環境デザインとの関わりを俯瞰する

統合環境デザイン論

IEDPの特徴は、従来別々の研究科や専攻でバラバラに行われてきた多様な設計科目を集めることで、居住環境を総合的に扱えるデザイナーとしての技量を磨く場を提供することです。本講義はスタジオの担当教員によるオムニバス。学生がすべてのスタジオを履修しなくても、多様な分野の環境デザインとの関わりや現在直面する課題などを俯瞰でき、各スタジオ課題では触れられなかったことを補うことで、より一般的な知識を提供する科目です。(IEDP修了要件)



教育プログラム発、社会実験への橋渡し

2007年度から始まったスタジオコース「環境デザイン統合教育プログラム (IEDP)」では、これまで様々な観点から社会課題の解決に向けた提案に取り組んできました。その一方、提案の実践は学生側に委ねられてきた側面が強く、せっかくの提案を社会に問う機会が少なかったと言えます。提案の積極的な実践をめざし、2020年度からは株式会社電通国際情報サービス (ISID)「オープンイノベーションラボ (イノラボ)」との共同研究「環境デザインと最先端技術の統合をケースとする社会実験構想学の創成」が始動します。

「IEDPで生み出したシーズを、共同研究で実践する」。

出口戦略を見据えた提案作成に、あなたも取り組んでみませんか？

ISIDイノラボとは 先端テクノロジーを活用したサービス開発を世界に先駆けて手がけていくことを目的に、ISIDが2011年に設置した研究開発組織です。社会課題の解決に向けて、生活者の行動をデザインし、先端技術を活用した仕組みを実装するべく、国内外の企業や教育機関、スタートアップとのオープンコラボレーションを推進しています。現在は「街づくり・地方創生」「ヘルスケア」「モビリティ」「食・農業」「匠の技の伝承」などのテーマを中心に、プロトタイプ開発や実証実験を通じて、新たなソリューションの創出に取り組んでいます。

Produce シーズをつなげ、実践する 「社会実験構想学」共同研究

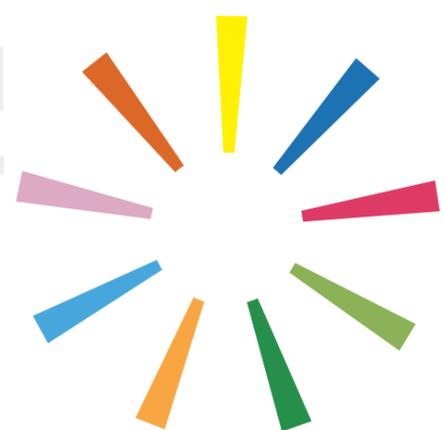
最先端技術の専門家集団と協働して社会実験を育てる

スタジオ期間終了後、スタジオで生まれたデザイン提案シーズと、イノラボの持つ先端技術の知見や社会実装のノウハウを合わせてシーズの最適な組み合わせを検討し、提案した学生、教員とイノラボのワーキンググループで社会実験を企画します。実装の場所の検討、企画の精緻化、実施体制の整備などを経て、社会実験の実施へとつなげていきます。これにより、皆さんの提案を社会へ問う道を開きます。

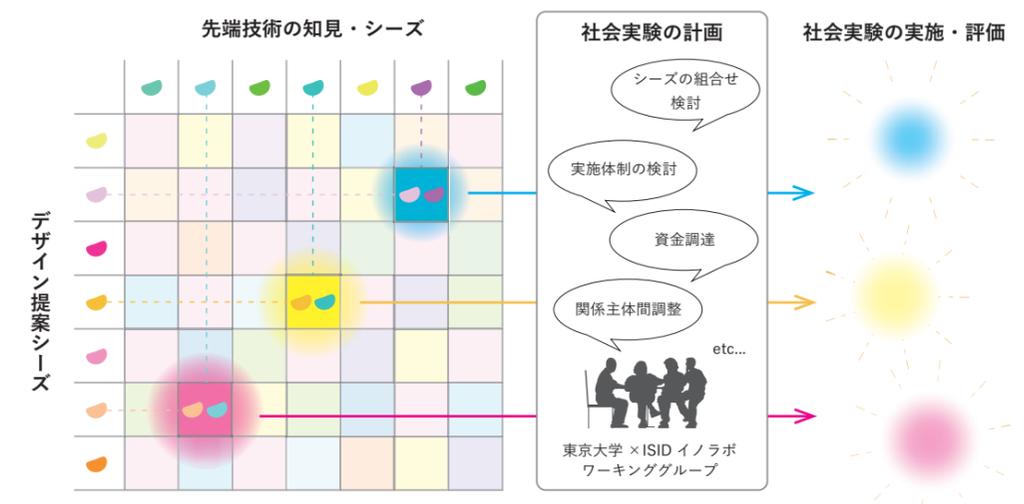


Create シーズを生み出す 環境デザイン統合教育プログラム (IEDP)

IEDPのスタジオの中から、イノラボと積極的に共同する「コラボスタジオ」を設けます。コラボスタジオでは、提案が実践につながりやすくなるよう、講義や提案へのアドバイスなどの形で、イノラボからのインプットを得る機会を作ります。



Integrated Environmental Design Program



IEDP スタジオ発のデザイン提案シーズとイノラボが持つ先端技術に関する知見をマッチング

シーズの組み合わせを育て、社会実験を実施

「社会実験構想学」の創成



2020 年度新設スタジオ教員紹介



小林 博樹 教授



東京大学情報基盤センター教授。神戸生まれ。大阪・広島・シンガポール・米国で過ごす。高校生の頃に森の環境音に興味を持つ。卒業後に1998年頃から西表島のライブ音プロジェクトに参加し、2001年から日本総務省大臣官房管理室・新千年紀記念行事推進室等の各メディアプロジェクトにシステムエンジニアとして勤務後、研究職が向いてる気がして大学に行くことにした。野良猫好き。環境問題の解決支援として、情報空間と生態系が分かちがたく一体化し、全体として高度な情報処理を実現するシステムを研究している。JSTさきがけ研究者。イタリアのアルテ・ラグーナ賞（ヴァーチャルアート部門）を2017年に受賞している。

Webサイト：<http://kobayashi-lab.com/>

佐々木 遊太 非常勤講師



メディアアーティスト、街頭紙芝居師。「多様な背景を混在させる状況を生むメディア」を目指して制作をしている。大学卒業後、フリーの映像作家兼街頭紙芝居師（東京都公認ヘブンアーティスト）、日本科学未来館での展示制作、及びフロアアクティビティの開発、東京藝術大学社会COI拠点プロジェクト特任研究員を経て、東京大学空間情報科学研究センター小林博樹研究室で学術支援職員をしながら、自主制作を続けている。キウイとパパイヤマンゴーズ『東京のフォホー』MVで、ANIFEST 国際アニメーション映画祭ノミネート。作品「鈴木よしはる」で、WIRED CREATIVE HACK AWARD 2016グランプリ。「即席紙芝居」「ズームイン顔」で、第15回・第19回文化庁メディア芸術祭審査委員会推薦作品選出など。「『どうぞどうぞ』をしらべる」で、平成30年度文化庁メディア芸術クリエイター育成支援事業採択。

Webサイト：<http://sasaki-sasaki.com/>

鈴木 亮平 非常勤講師



アーバン・デザイナー。NPO法人urban design partners balloon 代表、株式会社MeHiCuLi代表取締役、株式会社ろじまる副代表、NPO法人香取市自助・互助ステーション副理事長。2009年度の都市環境デザインスタジオでの提案をきっかけに、2010年、大学院生6名でballoonを設立、2012年にNPO法人化。“たなカー&ぶらっと”というアイデアを基に、少子高齢化、人口減少が進む中で、社会の縮小を前提とした豊かなまちづくりを目指して、全国各地でまちづくりプロジェクトを展開中。

Webサイト：<http://www.tanacar.co.jp/>

過年度のスタジオ成果

■ 建築環境デザインスタジオ	10
■ 建築構造デザインスタジオ	12
■ 都市環境デザインスタジオ	14
■ 緑地環境デザインスタジオ	16
■ 自然環境デザインスタジオ	18
■ 流域環境デザインスタジオ	20

建築環境 デザインスタジオ

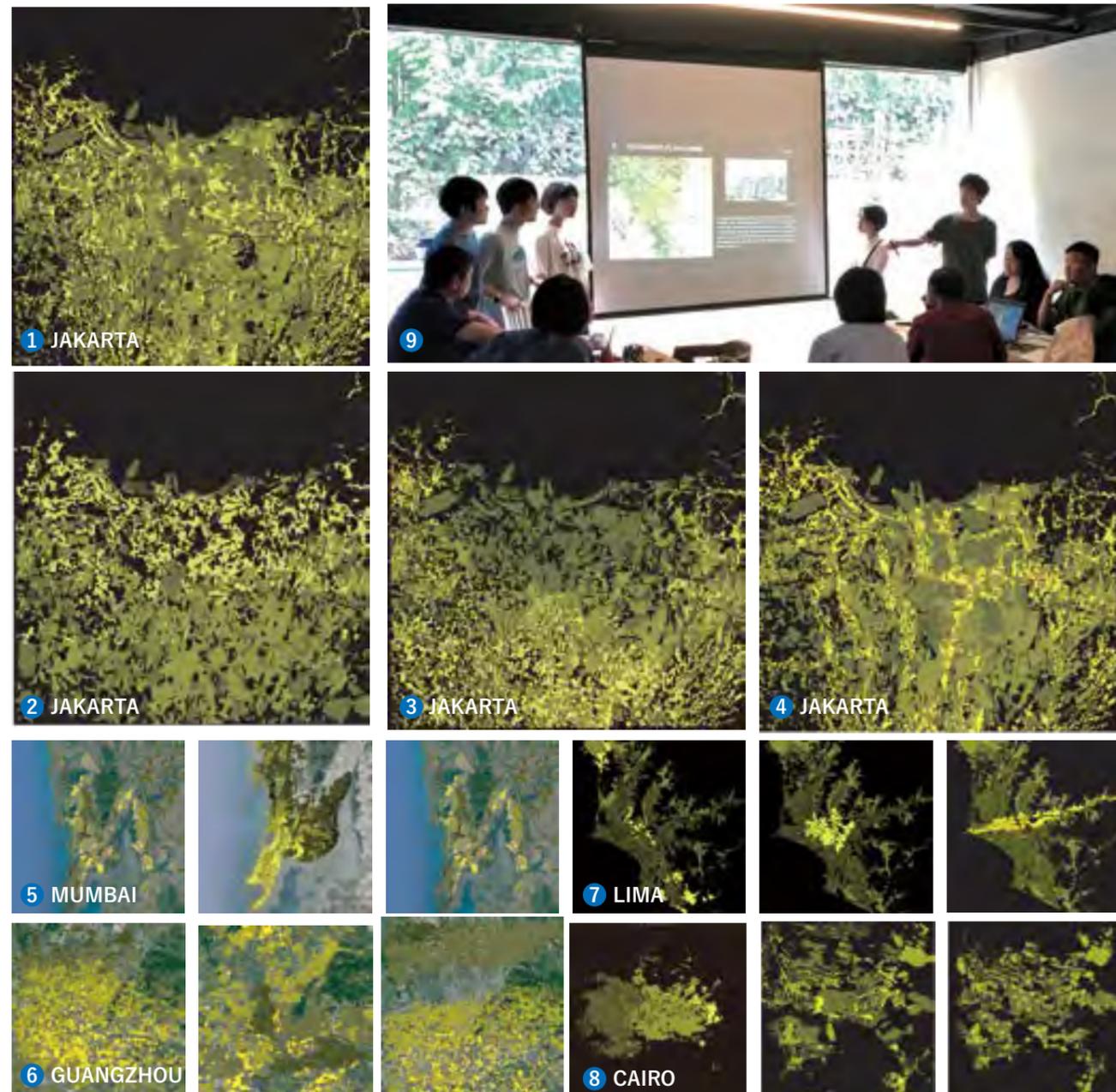
担当教員 岡部明子
 非常勤講師 林玲子 (国立社会保障・人口問題研究所)、石川初 (慶応義塾大学)
 ゲスト 雨宮知彦 (ラーバンデザインオフィス)、Evawani Ellisa (インドネシア大学)

Trading Spaces (2019年度)

都市インフォーマル地区の人たちは、屋台やバイクタクシーなどインフォーマルセクターに従事している人が多く、地区内では土地や家屋を含めインフォーマルな取引がめずらしくありません。そこで、2019年度は、空間を直接交換する「空間のトレード」を提案する課題に取り組みました。

スーパーマクロスケールを扱うスタジオ1では、現状の都市全体をDovey+Kamalipourの考案した4段階のインフォーマル度別に塗り分けた上で、空間的分布を再配置することで、異なる都市シナリオを

描き出しました。ジャカルタ、ムンバイ、広州、リマ、カイロ、ナイロビ6都市のそれぞれ50km四方のエリアを対象とし、まず航空写真の目視により現状をマッピングします①。次に、そのインフォーマル度別各面積は変わらないと仮定して、空間的に異なる配置を各都市3シナリオ作成します②～④。作成した3シナリオに対し、「どのような要因が働けば、提示した空間分布になるのか」のストーリーを推察しました。スタジオ2ワークショップ@ジャカルタにて成果発表しました⑤。



(ベースマップは @ Google Earth)

Formal/[IN]Formal x Celebration (2016年度)

都市インフォーマル地区は、フォーマル地区と、ときには高級住宅地と隣接しています。また、政府はインフォーマル地区をフォーマル化することで劣悪な居住環境問題を解決しようとしており、インフォーマルとフォーマルのせめぎ合いがあります。2016年度は、〈Formal-Informal〉の境界面に着目しました。スタジオ1では事前サーベイによって、都市ジャカルタ全体の多様な境界、すなわち〈縁〉を見出し、そこに現れる歪みや問題点を抽出しました。また、〈Formal-Informal〉を橋渡すことで、インフォーマル地区に住む当事者の目先の欲求を満たし、かつ、地球環境対策ともなる提案をハード・ソフト面で構想しました。



スタジオ2では、実際に実際に現地での短期(1週間)実践ワークショップをインドネシア大学と合同で実施しました。まず、敷地脇を流れる河川沿いをフィールドサーベイし、都市と河川の間を〈Formal-Informal〉の視点から分析しました⑩。次に、インフォーマル集住地で企画された結婚パーティ=CELEBRATIONという機会を借りて、〈Formal-Informal〉をブリッジするような構築物+アクティビティのデザインをチームに分かれて提案しました⑪。その後、住民投票によって選ばれた提案を実際に制作し⑫、仮設的な祝祭の空間を生み出しました⑬。



建築構造 デザインスタジオ

担当教員 佐藤淳

①ワークショップスケールの架構に生まれる形態

ワークショップスケールの小規模架構を構築する体験は、材料特性、幾何学特性、力学、職人の技術、現場環境、消費エネルギーの低減に基づいた構造形態を生み出す手法を知る良い機会となります。大自然の全てを知ることはできない中で、簡素な検証で安全性を判断するエンジニアリングの手法を学ぶこともできます。実物大でしか体感できない材料特性および空間特性、構造計算との整合性、構築可能性を示すものとなります。

②“ねぶた構造”-壊れても死なない構造

針金の骨組を和紙でくるんだ、青森の「ねぶた」の表皮のような架構です。軽量で柔らかく、災害で壊れても人が死なない、そんな建築構造の可能性を追究しています。人が載れる部分を作ることもひとつの目標です。

③和紙

日本伝統の和紙は楮（こうぞ）や三桠（みつまた）の繊維で作られ、繊維が長いので強い紙です。繊維同士は水素結合だけでくっついている自然素材です。和紙で作られるものには、「ねぶた」「和傘」「提灯」「紙風船」などが挙げられます。青森の「ねぶた祭り」で巡航す

る「ねぶた」の表皮は、針金で形を作り、和紙で覆っています。和傘は軽くて柔らかい構造の代表格です。防水のため亜麻仁油（あまにゆ）や荏油（えのあぶら）が塗られています。か細い骨組は色彩豊かな糸で編まれ、この糸が座屈止めの役割をしています。

④形状スタディ

流線型、球、風蝕、枝分かれのアルゴリズム、果実、雲、航空機、桐油、柿渋、こんにゃく糊、under storey、キーワードが次々と挙がります。皆のアイデアを集約すると、2014年度は雲型と球型を連ねた形状になりました。2015年度は灌木の中のツリーハウスをイメージしました。

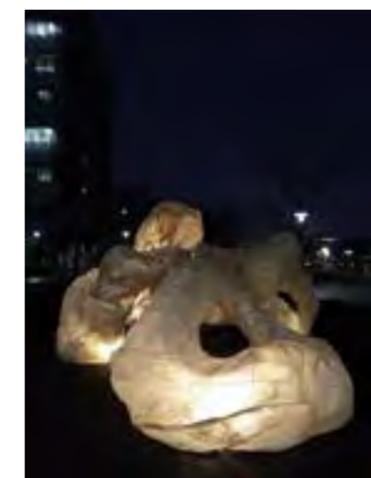
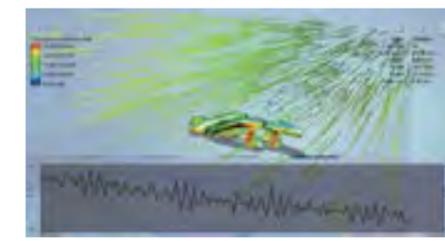
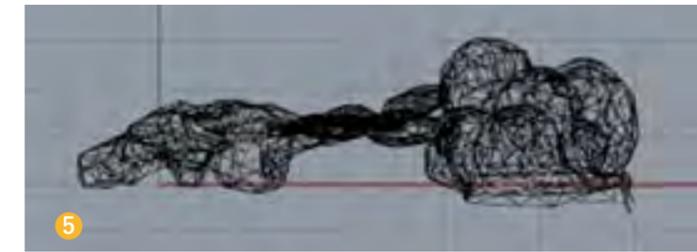
⑤実験と解析

東京大学柏キャンパスは強い風が吹き抜けます。「春一番」を想定して、大きく変形しながらも風速20 m/secに耐える形態を目指しました。和紙を引かせ、3mmの針金の座屈と塑性化を制御し、材料非線形

解析で推測しています。「座屈長さ」は40cm以下に制御する必要があります。荷重増分解析、材料試験、模型による抗力係数の計測、抗力係数の解析、アンカー用スクリューベグの引張試験を経て、空気抵抗の少ない形状を決定しました。

⑥製作

たった1mmの針金の細工が困難極めます。巨大な幹、巨大な枝葉のパーツの製作は難航します。屋外での設営が始まった途端、「春一番」と「大雨」に見舞われ、大ダメージを喰らってしまいました。油の硬化が進みきっていない和紙がボロボロに剥がれてしまいました。それでもくじけず完成に漕ぎつけました。足元の中にはオモリのレンガが仕込まれます。こうしてできた、「大自然」を感じる建築です。和紙に油を塗ると半透明になります。面材やメッシュ状の半透明な構造が光や熱に対する「フィルター」としての役割を持つようになります。



- 規模
 大きさ：長さ 12 m × 幅 4 m × 高さ 3.2 m
 重量：本体 200 kgf + 基礎用オモリ 200kgf (レンガ)
- 使用材料
 越前和紙「やわらがみ 金和紙」(楮紙)
 主骨組：針金 #10, φ3.1mm
 接合用：針金 #18, φ1.1mm
 防水油：荏油 (えのあぶら)
 接着剤：でんぶん糊
 基礎：オモリ用レンガ
- 荷重
 重力：1G = 980 cm/sec²
 風速：38 knots = 20 m/sec
- 安全対策
 侵入防護柵：ポール, 鎖
 強風対策：スクリューベグ, 針金, 漁網

都市環境 デザインスタジオ

担当教員 清家剛、出口敦、清水亮
非常勤講師 山下博満(日本設計)、三牧浩也(柏の葉アーバンデザインセンター)

①②③④⑤ 長期的都市づくりにおける仮設的利用と暫定的利用からの都市デザイン (2015年度)

近年、屋台や露店などの仮設的な設えについての研究や実践が進められています。また、ハード施設整備前の空き地を利用した暫定的な土地利用やコンテナを利用した商業施設が登場しています。この課題では仮設的・暫定的な土地/建物利用のアイデアを有効かつ積極的に活かした成長・発展のプロセスを提案しました。

①末富、柳原、鈴木は利用開始から10年が経過した柏の葉キャンパス駅に南口を設けることで、段階的な街の発展を提案しました。②

生田は、駅周辺の公共空間上に仮設的な構造体を設けることで、賑わいを生み出す提案を行いました。③蔭、韓は、つくばエクスプレスの高架下に仮設空間を設けることで周辺地区との繋がりを提案しました。④藤原、茅野は柏の葉小学校の児童数の将来予測に合わせた街の変化を提案しました。⑤栗田、鈴木、早川は未利用地をプランターに見立て、緑を育て、楽しむ街のあり方を提案しました。

⑥⑦⑧⑨⑩ 学生が住みたい街のデザイン (2016年度)

柏の葉キャンパス駅周辺では超高層住宅をはじめ、商業施設やオフィスなどの開発が進んでいますが、学生向けの住宅供給とは相容れず、

賃料の高騰もあり、同地域に居住する学生は少ないのが現状です。キャンパスタウンとして地域の住民らと共に郊外環境の良さを享受しながら創造的な暮らしができる環境づくりを提案するのがこの課題です。

⑥牧野、朱、楊は戸建住宅地のコミュニティ・ハウスにおいて実際に住み込みながら学生向けシェアハウスの提案を行いました。⑦呉、北川、中西は、土地区画整理事業に取り残された地域、“Δ(デルタ)”に着目し、地域の将来像を提案しました。⑧大崎、大家、井桁は、本の交換をテーマとした住民交流イベントを実践しつつ、高架下空間に新しい図書空間を提案しました。⑨大野、小楠、落合は路地を中心に配置したヒューマンスケールの学生街を提案しました。⑩大國、和田、柴田は、多様な住民の生活・働き方が表出する用途混合型の街区を提案しました。

⑪⑫⑬ 郊外での新しい暮らし方を考える (2019年度)

開発が進みつつある柏の葉キャンパス駅周辺において、駅から数百メー

トル離れた幹線道路の国道16号をこえた地域、「柏の葉16号北エリア」を対象として、郊外都市のくらし方を考えることを課題としました。ここは鉄道駅や幹線道路と近接している一方で、未だに緑地や調整池などの自然環境も残されています。これらを活かして、郊外での新しいくらし方とエリア全体のデザインを、提案として求めました。

⑭馬、中川、岡田、小林は、緑地の残る斜面を利用して、既に開発された市街地と新しく開発する敷地をつなぐように、住宅と公共施設を組み合わせた開発を提案しています。⑮田谷、高橋、小山、北島は、柏の葉の特徴として大学や研究機関で短期に滞在する住民と定住する家族が、棚を使って交流を図るという提案を行っています。⑯常泉、中谷、リュウ、西澤、芝村は、野間土手という歴史と自然の残る風景を活用して、ここに短期滞在のノマドワーカーと呼ぶ住民を集める場所とくらし方を提案しています。



緑地環境 デザインスタジオ

担当教員 横張真、田中俊徳、寺田徹

人と自然の持続的なかかわりを追及する

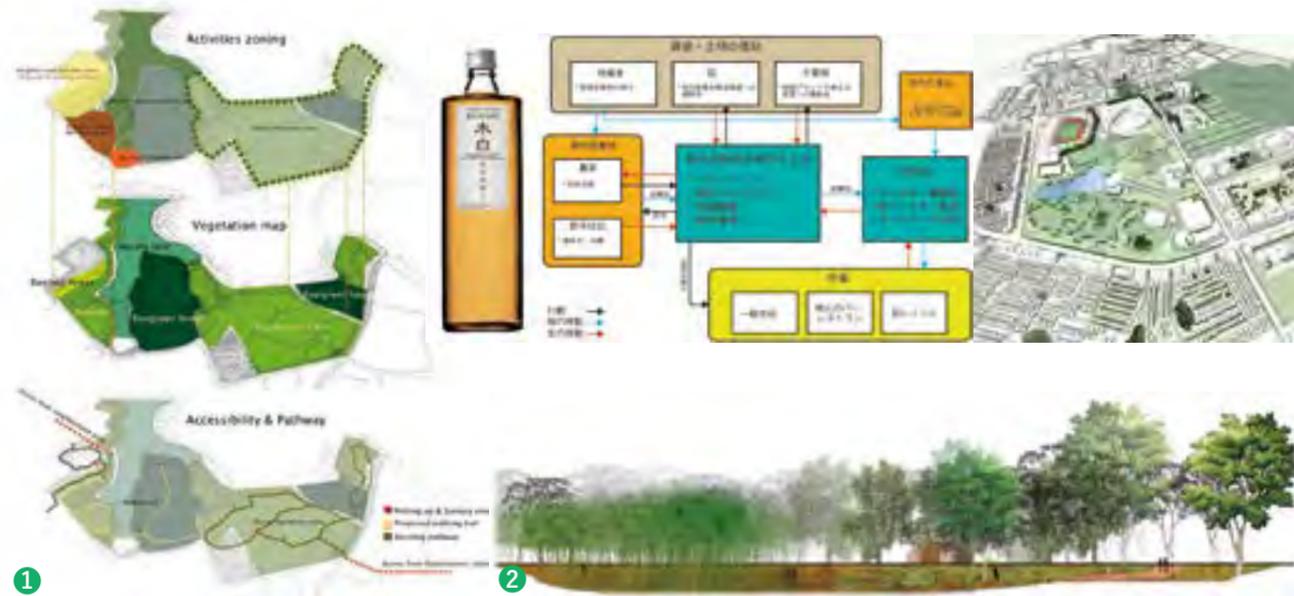
流山のサステナビリティを考える (2015年度)

柏市に隣接する流山市は、つくばエクスプレスの沿線開発と併せて、近年若年層の増加を狙った独特の施策を展開しており、全国的にも名が知れる自治体になってきている。一方、里山保全や歴史的町並みの保存なども行われており、こうした様々な取り組み・資源が併存している。このような状況を様々な調査を通じて理解した上で、流山のサステナビリティを高めるためのランドスケーププランニング/デザイン、関連した社会デザイン(制度、施策、マーケティングなど)を提示する。①② Designing an unique dining experience inside satoyama (Ying Palopakon, Sameera Samarasekara, Shyam Kularathna, Natsuko Saigusa / Education village Honcho: Activating the legacy (Marina Slavova, Huma Mursaleen, Soshi Kayano, Maya Miteva, Wu Mann) / ③ Harvesting Nagareyama:

Promoting agriculture and history with local products (Sioen Giles, He Yingshi, Song Qing, Kenichi Shimizu, Reina Tsukimura)

Edible landscapes in the City (2016年度)

The aim of the landscape Design Studio 2016 is bringing innovative ideas to discover the chosen case study that fits the objective of the studio's theme, "Edible landscapes in the City". We will consider and propose a desirable way to implement "Edible landscapes in the City" that contributes to a rich and sustainable urban environment & lifestyle. Lemontree concepts (Liang Peng, Pavithra Wijenayake) / ④ A sustainable and social campus dining table (Ivy Ma Yankan, Katie Skillington, Keisuke Phillip Osaki, Shaswati Chowdhury and Yang Sihan) / E-Yasai (Fan Shuyi, Gesti Saraswati, Wang Lijuan)

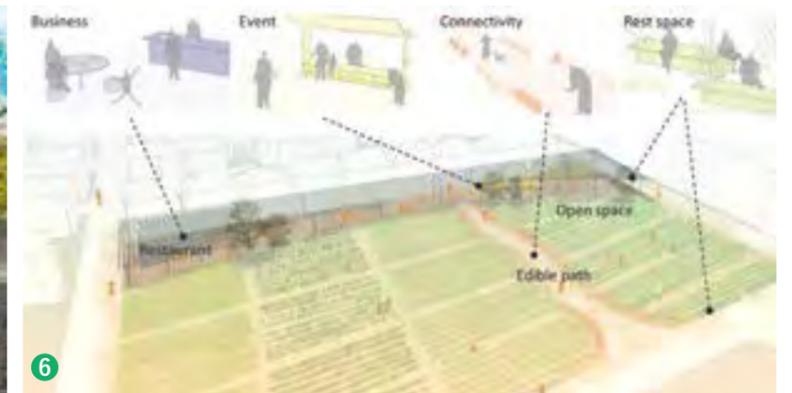


Agricultural urbanism: Re-designing Tokyo's urban fabric with agriculture (2018年度)

2018年度以降S2タームの集中講義とし、単位も4単位から2単位へと変更し、コンパクトかつ濃密なスタジオ運営に切り替えた。本年度は東京都練馬区の都市農業を対象とし、流域保全、流通支援、生産緑地保全、地域住民との交流など様々な観点から課題を分析し、提案を行った。Growing a garden under the forest (Thwe Ei, Kazuki Kuse, Yehan Wu, Bao Guo) / ⑤ Shirako River Origin: An Urban Agriculture/Watershed/Educational Model (Erwin, Jack, Ritao, Zhang Jie) / ⑥ Creating Multifunctional Public Space within Urban Farmlands in Nerima City (David Mason, Miyuki Wakasugi, Yutong Wang) / ⑦ Agro-Food Marketing for Urban Agriculture (Igor Voroshilov, HwaJin Lee, Jose Wong, Huang Shuzhe) / Identifying the Factors that Determine Continued Use of PGL (Spencer, Azka, Ken, Helen) / Establishing a "Harvest-Cook-Dine" Program to Preserve Urban Farming Culture in Nerima Ward, Japan (Michael Padilla, ParvinaPasilova, Tuvshin Delgerekh, YidaJiang)

みどりを活かした持続的なコミュニティの提案—東京都町田市を対象に (2019年度)

首都圏郊外都市である東京都町田市を対象に、多摩丘陵の豊かなみどりを活かしたライフスタイルやまちづくりに関する提案を行った。柏キャンパス(主にサステナビリティ学教育プログラム)と本郷キャンパス(都市工学専攻)のジョイントスタジオとして運営した。⑧都市と郊外のスキマー—Urban Haven Machida: テレワークによる新しいライフスタイル New teleworking lifestyle (David Mason, Yu Matsumura, Ken Muramatsu, Jasmine Zhang) / ⑨町田市の気質を未来に紡ぐまちづくり Embedding Machida's Historical Identity into Future City Planning (Ana Paula Schmitz, Yutong Wang, Miho Wakaki, Kaito Miura) / 多摩中央地域の自己実現回廊 Mid-Tama subcenter corridor for self-actualization (齐慧洋, 武思辰, 西井成志, 山岸彩夏) / SatoyamaMachida 人々と里山との新たなつながりの形成 Fostering New Connections for People with Satoyama in Machida (久世和希, Wongdara Haruesit, Ron Allan Estrebilllo, Yutian Ding)



流域環境 デザインスタジオ

担当教員 徳永朋祥、福永真弓、坂本麻衣子

「流域」をキーワードとする学融合スタジオの模索

2017年度と2018年度に、神奈川県鎌倉市滑川流域を対象に、水を中心とする「自然」と「社会」、そしてその両者の関わり合いの表出としての「ランドスケープ」という3つの視点で、文理融合の調査提案活動を行った。地元関係者・団体との対話にもとづき地域課題やニーズを明らかにし、受講生の問題意識や興味とすり合わせながらテーマを固めていくなかで、最終的には以下に示すようなタイトルでグルー

プワークの成果を発表し、関係者へのフィードバックを行った。

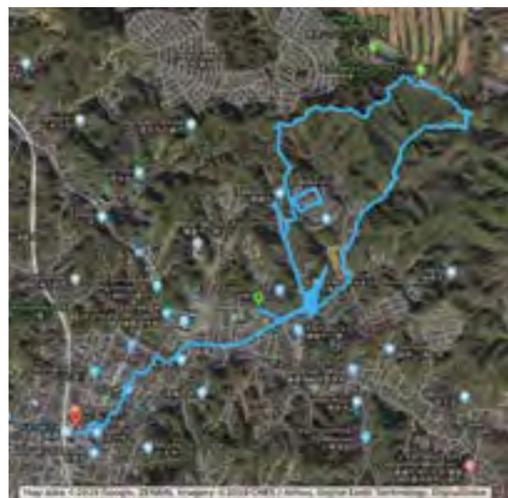
2017年度：鎌倉における外国人観光客の津波避難計画の検討と提案 (Development of an International Tourist Evacuation Plan for Kamakura) / 鎌倉市材木座地区における地域資源と既存コミュニティを基盤とした新たな住民ネットワークのあり方：「災害に強いまちづくり」を目指して (Building a resilient community

network utilizing local assets and existing small communities in Zaimokuza Area, Kamakura City) / 青少年を中心とした地域河川への認識とアクセスに関する評価とデザイン提案：滑川中流域を事例として (Assessment and Designs for Improving Teenagers' Accesses to and Recognition of Small Rivers: A Case Study at the Midstream of Nameri River in Kamakura, Japan) / つなぐ食—3つの軸で創る文化— (Connection via Meals: Culture Created with the Three Proposals)

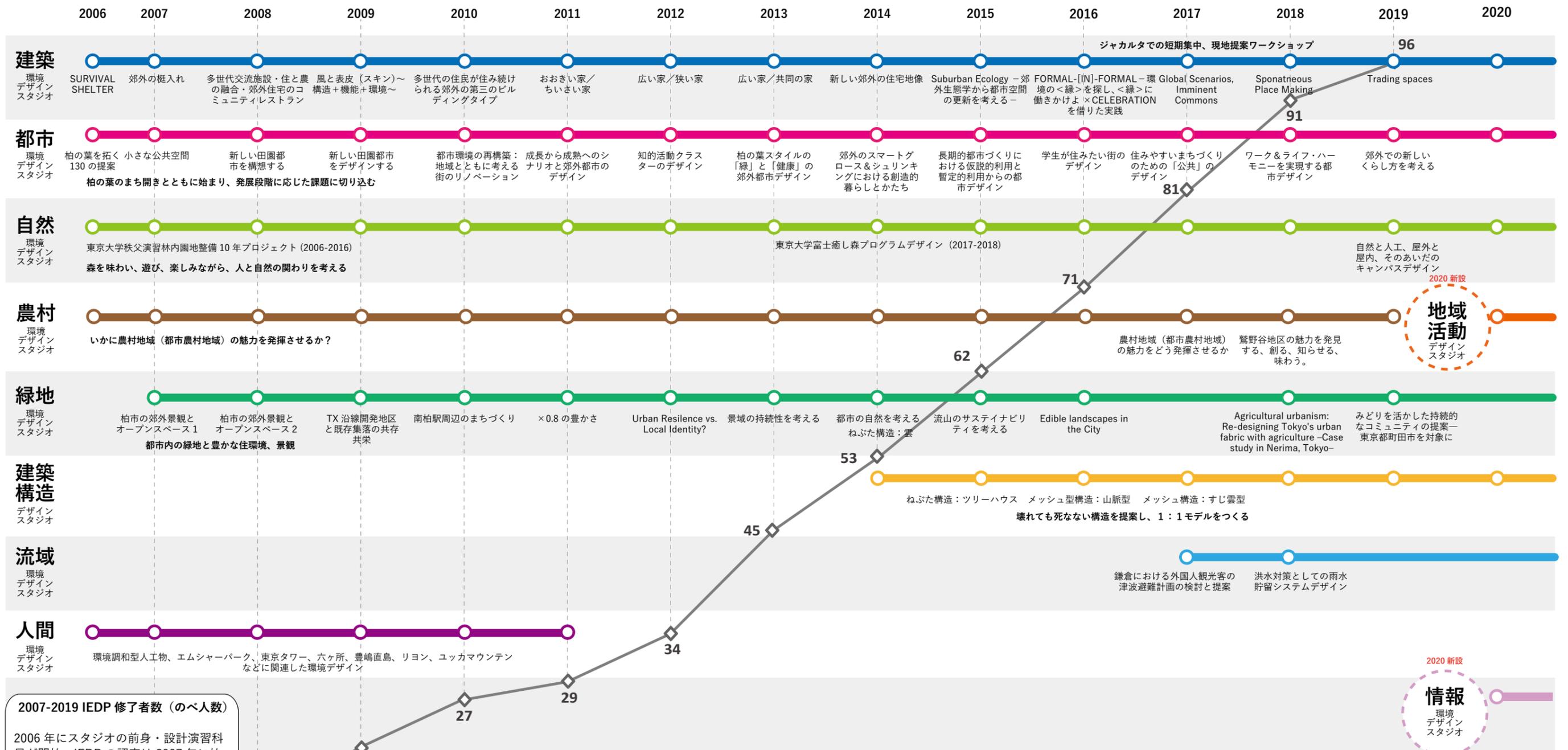
2018年度：洪水対策としての雨水貯留システムデザイン (Contribution of rainwater harvesting (RWH) system to manage floods in Kamakura) / 永福寺の水質改善に関する提案 (Water quality management plan in the historical site in Eifukuji) / 「防災」を考え直す—温故知新の地域づくり— (Reexamination

of landslide risk reduction measures with the use of local traditional practices) / 都(会)と森と水の鎌倉を作るための協働構想 (Conception to Build a Network/Collaboration to Foster and Protect Kamakura's Urbanity/Aciency, Forest, and Water for Its People)

本スタジオでは、流域という社会的・生態的なひとつのまとまりのもと、様々な分野の受講生・教員、そして地元関係者が集まり、ディスカッションを通じて地域課題に対する理解を深め、何らかの共通理解を見出す中で、あるべき流域の姿を模索することを試みた。それは現場をフィールドとする学融合への試みでもあった。2年間の学融合スタジオの模索から得られた経験や反省にもとづき、現在、新たな体制でのスタジオ運営について検討を行っている。



環境デザイン統合教育プログラム (IEDP) のあゆみ



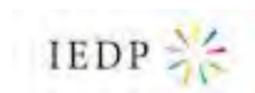
IEDPは2007年の開始以降、「環境デザイン」の旗のもと、多彩な教員陣がそれぞれの取り組む社会課題をもとに、現地調査や実習を通じた提案活動を行う演習科目「スタジオ」を主宰してきました。それぞれのスタジオは、おおむね社会課題抽出→テーマ設定→提案作成→実践、のプロセスのうち、複数の段階を意識して進められています。参加した学生は、課題に対し多くの提案を行い、学生提案からの実践やスピノフ活動も行われてきました。

IEDP実施体制の充実と学内外との共同により、実践に向けた展開が期待されることから、2020年度からは新たな体制で実施されます。

2020 新設
地域活動
デザイン
スタジオ

2020 新設
情報
環境
デザイン
スタジオ

Web サイト URL



IEDP トップページ

<http://www.iedp.site/iedp/iedp-top.html>



社会実験構想学

社会実験構想学トップページ

<http://www.iedp.site/research-top.html>



問合せ先一覧

教育プログラム全般については事務局の柏原までメールでご質問ください。
各スタジオについては、各スタジオ担当教員までお尋ねください。

建築環境デザインスタジオ | 岡部 明子 aokab@edu.k.u-tokyo.ac.jp

建築構造デザインスタジオ | 佐藤 淳 junsato@edu.k.u-tokyo.ac.jp

都市環境デザインスタジオ | 清家 剛 seike@edu.k.u-tokyo.ac.jp

自然環境デザインスタジオ | 寺田 徹 terada@edu.k.u-tokyo.ac.jp

情報環境デザインスタジオ | 小林 博樹 kobayashi@csis.u-tokyo.ac.jp

佐々木 遊太 sasaki@sasaki-sasaki.com

地域活動デザインスタジオ | 鈴木 亮平 ryohei@tanacar.co.jp

緑地環境デザインスタジオ | 横張 真 myoko@edu.k.u-tokyo.ac.jp

流域環境デザインスタジオ | 徳永 朋祥 tokunaga@edu.k.u-tokyo.ac.jp

事務局 | 柏原 沙織 kashihara@edu.k.u-tokyo.ac.jp

環境デザイン統合教育プログラム Integrated Environmental Design Program (IEDP)

発行者

東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学系
〒277-8561 千葉県柏市柏の葉 5-1-5

Publisher

Division of Environmental Studies
Graduate School of Frontier Sciences
The University of Tokyo
5-1-5 Kashiwanoha, Kashiwashi, Chiba, 277-8561